

河南竜山・二里头・殷周都市の特質 — 2011 年、中国古代都市遺跡調査報告—

江 村 治 樹

はじめに

筆者はかつて、中国古代都市社会の展開について殷周時代の第一段階と戦国秦漢時代の第二段階に分けて考えることができた⁽¹⁾。すなわち、殷周時代の都市は軍事的、政治的、宗教的要素が強いが、春秋中期における社会変動を経過する中で都市は経済的要素が大きくなり、戦国秦漢時代には民衆をも包摂した都市社会が成立すると考えた。

戦国秦漢時代の都市については文献史料だけでなく、膨大な考古資料の蓄積があり都市社会の特質についてこれまで検討を重ね相当程度解明することができた⁽²⁾。しかし、殷周時代の都市については、文献史料はほとんど残されておらず都市遺跡を中心に検討せざるを得ないが、当時、戦国秦漢時代に比べて調査された遺跡は非常に限定されたものであった。ところが今世紀に入り、殷周時代やその前の竜山期や二里头期の都市遺跡について、従来発見の遺跡の調査が進展するとともに、新しい遺跡も続々と発見され調査されるようになった。そのため、殷周時代を中心とする都市について新しい材料にもとづいて改めて検討しなおす必要が出てきた。

幸いにして、平成 23 年度に以上の課題に関わる科学研究費補助金が採択され⁽³⁾、2011 年 8 月中旬に河南省中心部の殷代を中心とする都市遺跡の調査を行うことができた。本稿は調査による最新の知見をふまえて河南省中心部の竜山期から殷周時代までの都市の特質について初歩的な考察を行うものである。河南省中心部に限定したのは、この地域が戦国時代を中心とする時代に典型的に都市が発達する地域であることである。そして、同時にこの地域が中国古代文明が発生した先進地域であり、中国古代都市の発展過程を考える上でモデルとなる場所であり、まず最初に考察の対象とすべき地域であると考えたからである⁽⁴⁾。なお、以下に言及する都市遺跡の位置は地図 1 のごとくである。

一 竜山期から二里头期の都市

(1) 竜山期

河南省において最初に確認された竜山期の都市遺跡は、1931 年から 1934 年にかけて梁思永氏によって発掘された、都市遺跡表の 2 安陽後岡遺跡⁽⁵⁾と思われる。この時、竜山期の白灰面建

(1)

築遺跡と版築城壁が一部分発見されたが、その後それほど注目されることはなかった。

竜山期の都市遺跡が俄然注目されるようになるのは、1980年前後にほぼ同じ頃発見された5 淮陽平糧台城址と11 登封王城崗城址が紹介されてからである。

平糧台城址 一辺 185 m の正方形城址で南北の城壁に城門が一つずつ確認され、南城門には門衛房があり、門道の下に陶製の排水管が発見された。城内には建築物の基礎が10 余箇所発見されたが、このうち4 号建築遺跡は版築土



地図1 河南竜山・二里頭・殷周都市遺跡地図

台の上に築かれており、しかも壁は土塊（日乾レンガか）を積み上げたものであった。灰坑から出土した木炭の放射性炭素年代は 4130 ± 100 年、 4355 ± 175 年（ともに樹輪校正年代）で竜山文化晩期の早い時期に属する。この城址の位置づけについては、太昊都城説や虞氏部族城址説、先商城址説などがあるとされる⁽⁶⁾。地理的位置から東方諸族との関係が考えられているが、都城とするには規模が小さすぎる。

王城崗城址 戦国陽城遺跡の西、南に箕山を望む五渡河と潁河に挟まれた河岸段丘上に発見された。東城と西城からなり、東城東部は五渡河に破壊されていた。城内には版築層が確認され、人骨を埋めた奠基坑をともなっていたことから特別な建築物の存在が想定されている。また青銅片が発見されたことも注目される。出土の木炭の放射性炭素年代は 4000 ± 65 年とされ、この年代は紀元前 2050 年で夏王朝初期に相当するとされた。そして、この城址の東方には戦国期に「陽城」と呼ばれた都市遺跡、南方には箕山があることから、この城址は当初から禹都陽城とする説が主張された⁽⁷⁾。しかし、規模から言って夏王朝の国都とするには懐疑的な意見もあった⁽⁸⁾。ところが、今世紀に入って西城の西部に一辺 600 m の大城が発見され、従来の東城、西城は合わせて小城と呼ばれるようになった。大城の年代は小城より遅いとされ、小城は夏王朝成立前の鯀の作城、大城の方を禹都陽城する説が一般化しつつある⁽⁹⁾。小城は夏王朝より前の竜山晩期の城址と言うことになる。

郝家台城址 その後確認された竜山期の城址として、遺跡表の1 鄆城郝家台城址がある。この城

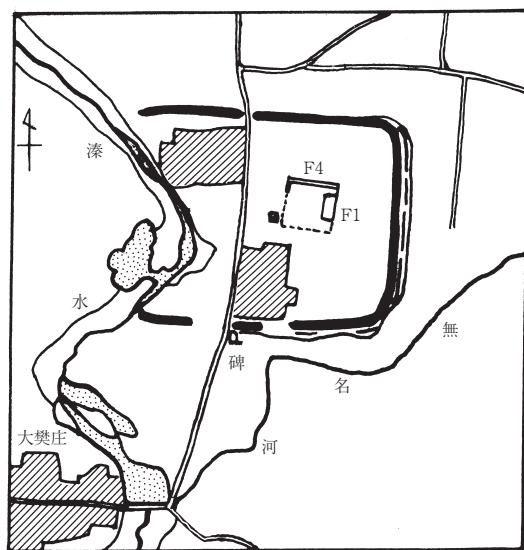
址は、1986 年から 1987 年にかけて発掘された円角長方形城址で、中原竜山文化で最も早い時期のものとなっている。李麗娜氏によると、馬世之氏に、華夏集団が苗蛮の北進を防ぎ、三苗を征服するための重要な軍事拠点であったとする説があるとする⁽¹⁰⁾。

今世紀になると、河南省でも竜山期に遡る都市遺跡が続々と発見、または確認されるようになった。遺跡表の 3 温県徐堡城址、4 博愛西金城城址、6 新密古城寨城址、7 輝県孟庄城址、8 平頂山蒲城店の東北側城址などである⁽¹¹⁾。

徐堡城址 2006 年に発掘された円角長方形城址である。西城壁と東城壁の中部に城門があり、城内中部に突き固められた台地ある。北城壁は沁河によって破壊されており、禹の覃懷治水と関係があるとされている。

西金城城址 2006 年から 2007 年にかけて発掘されたやはり円角長方形城址である。西城壁と南城壁に城門があり、城壁外に小河や堀が廻っている。また城内東南部に高い岡があり、構造的には上述の徐堡城址とよく似ている。

古城寨城址 今回現地調査をすることができた遺跡であり少し詳しく紹介する。この城址は西部は漆水によって破壊されているが、北、東、南の城壁はほぼ残っており（地図 2）、グーグルアースによっても明瞭に確認できる。以前は西周時代の鄆国の都城とされていたが⁽¹²⁾、遺跡からは仰韶、竜山、二里頭、殷、西周、漢代の陶片が採



地図 2 古城寨城址

集されており、かなり時代が遡る可能性があった。1997 年に大面積の調査が行われ、南城壁の解剖発掘により城壁は竜山期のものであることが確認された。1998 年から 2000 年にかけて城壁と城内の発掘が行われ、城内東北部に大型の建築遺跡が発見された。F1 建築基礎は南北長方形（東西 13.5m、南北 28.4m）の版築による高台建築で、北側に回廊 F4 が接続しているのが確認された。杜金鵬氏は、東部に主殿があり、その西側の庭を回廊で囲んだ四合院建築の雛形であるとし、竜山文化の原始宮殿とみなしている⁽¹³⁾。そして、二里頭遺跡の宮殿が坐北朝南であるのと異なるが、四合院型式である点共通性があり、後代の宮殿建築との連続性に注目している。

古城寨城址は新鄭市街の西北 10km 余りにあるが新密市に属している。新鄭市の遺跡は河南省文物考古研究所の管轄であるが、新密市の遺跡は鄭州市の管轄であるとのことである。したがって、城址の見学は鄭州市文物考古研究院に依頼してもらうことになった。見学当日には、かつて古城寨城址を調査したことのある鄭州市文物考古研究院の劉氏が新鄭の宿泊ホテルまで車で迎え

に来てくれた。城址まで新鄭市街から簡単に行けると思っていたが、車は107国道を北上して郭店鎮近くまで行き、そこから西して新密市の曲梁鎮手前で南下し、東南に向かっていくつかの村落を抜けてようやく到着した。案内人がいなければたどり着けない相当辺鄙なところにある遺跡であった。城址の手前の石橋を渡ったが、左手は湖水のようになっており石橋は溱水を堰き止める堰堤と思われる。坂を少し登ると右手に「鄆国故城」と書いた碑があった(図1)。碑の傍の城壁には版築層が認められ、劉氏によると西周ではなく竜山期のものとのことであった。劉氏の案内で南、東、北の城壁の外側を歩くことにした。碑の所から下り坂になっており、城壁の東南角の直下はトウモロコシ畑であったがかなり低く、城壁は小山を見上げるような高さであった。城壁の上まで3, 40 mはあると思われ、東南角直下は地図2上の無名河の底あたると考えられる。東城壁も見上げる高さで(図2)、斜面が何段にもなっているのが見て取れ、トウモロコシ畑の



図1 古城寨城址南城壁



図2 古城寨城址東城壁



図3 古城寨城址北城壁断面



図4 古城寨城址城内東北角方向

部分だけでも二段になっていた。北城壁は東城壁ほど高くはないがそれでもかなりの高さであった。西に歩いて城内を南北に貫通する道路までたどりついたが、北城壁の西側断面は版築層が分かるように線が引いてあった（図 3）。道路を南に向かって歩いたが登り坂で両側は崖になっていた。城内中央部では崖はなくなり、道路の東側部分に入ることができた。城内東側は一面のトウモロコシ畑であり、北、東、南の城壁内側を見渡すことができた（図 4）。城内から見た城壁の高さはそれほどではなく、報告によると 5～7 m とされている。城内の遺構はトウモロコシ畑で全く確認できなかった。また城内は平らで高い土台も見当たらなかった。古城寨城址の内部はかなり高くなっており、外から見るとそびえ立つような城壁に守られた堅固な要塞都市のように感じられた。

孟庄城址 1951 年に試掘が行われているが、1992 年から 1995 年にかけて大規模な発掘が行われ全貌が明らかになった。遺跡の遺物は殷代晩期まで含むが、最も豊富なのは竜山期の遺物とされ、孟庄竜山文化の年代は紀元前 2400 年から紀元前 2100 年とされている。城址は竜山晩期に洪水により破壊され、二里頭期に城壁が補修されているとされる。洪水による破壊に関連させて共工氏と関係する城址とする説がある⁽¹⁴⁾。城内に地面式の房基が 16 箇所発見されているが、大型の建築物の基礎は未確認のようである。

蒲城店遺跡 1950 年代末に発見されていたが、2004 年から 2005 年にかけての発掘で遺跡の東北部で竜山中晩期の城址、西南部で二里頭早期の城址が並列するような形で発見された。竜山文化城址は北部が湛河故道に破壊されて正確な大きさは不明であるが、東西の長さはほぼ同じであり同規模の城址と推定される。城壁下部には基槽がなく二里頭文化城址より原始的である。城内で発見されたと思われる竜山期の F 39 房址は、少なくとも東西に三部屋が連なった土壁建築で、土壁の北側に排水溝、南側に出入口と散水があり、内部に炉があった。二里頭文化城址は円角方形城址で、北城壁外に二里頭期の 20 余基の房址が発見された。F 10 房址は東西に六部屋が連なる土壁建築であり、F 17 房址は二部屋が連なる土壁建築でそれぞれ南に出入口があり内部に炉が備えられていた。

以上にふれた竜山期の都市遺跡の特色は、後の新砦期、二里頭期以後に比べると規模が比較的小さく、軍事的な防御が固い城址が目立つことである。典型的なものは高壮な城壁を有する古城寨城址であるが、平糧台城址のように城門の数が少なく、門道も狭く門衛房まで備えているのも防御を第一に考えたためであろう。竜山期の城址には四面の城壁にそれぞれ城門を揃えているものは確認できない。この時代の城址は都市と言うよりも軍事的な城塞あるいは城堡と言ってよいであろう。

この点について、董琦氏は氏族社会末期を軍事防御が主体の城堡時期とし、竜山期はこの時期の晩期に当たるとしている⁽¹⁵⁾。近年では、魏興濤氏は、河南において竜山期に多数の城址が出現した原因について、中原と東夷などとの猛烈な衝突と戦争の結果とし、軍事的な要因を強調している⁽¹⁶⁾。また、李麗娜氏も河南竜山期における多数の小城址の出現から「万邦」林立を想定

している⁽¹⁷⁾。一方、呉文祥氏は人類学者 R.C. Carneiro の「限制理論 Circumscription Theory」を沿用して中国における文明の発生と戦争の関係を論じているが、中原地区竜山中晩期における聚落防衛のための城壁の出現を社会の緊張状態と戦争の頻発、過激化などと関連づけている⁽¹⁸⁾。河南の竜山期における多数の小城址の出現は軍事的な側面が大きいと言ってよいであろう。

(2) 新砦期・二里頭期

竜山晩期より後の新砦期、二里頭期の都市遺跡としては、上述の7輝県孟庄城址、8平頂山蒲城店の西南側城址、11登封王城崗の大城の他、9新密新砦城址、10鞏義花地嘴遺跡、12偃師二里頭遺跡、13滎陽大師姑城址、14新鄭望京楼城址などがある。

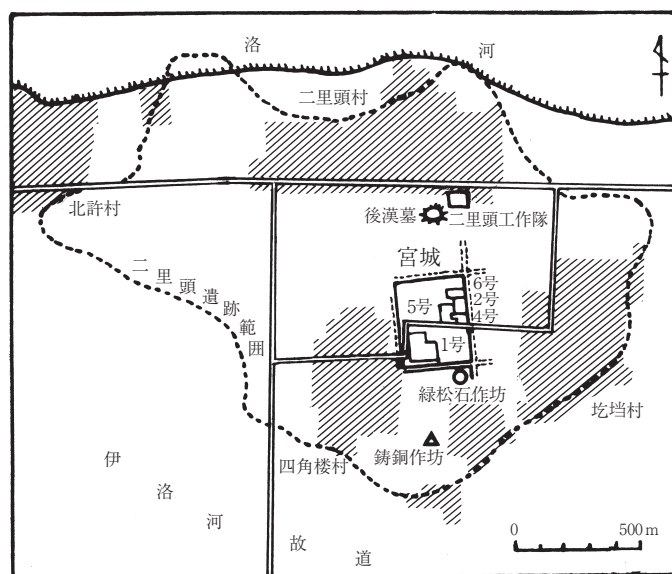
新砦城址 1975年に発見されて1979年に試掘が行われ、早くから知られた遺跡である。その後1999年、2000年の発掘で竜山晩期と二里頭早期の間に新砦期が存在することが確認され、2002年の発掘でも証明された⁽¹⁹⁾。新砦期の位置づけについては、中国ではこの時期を夏文化に含めるのが一般的なようである⁽²⁰⁾。2002年には新たに城壁と城壕が発見され、この遺跡は単なる村落遺跡ではなく都市遺跡であることが明らかになった。2003年から2005年にかけての発掘の結果、外壕、城壁と城壕（護城河）、内壕によって四重に防御された城址であることが分かったのである。東城壁の試掘では二里頭晩期の城壕、新砦晩期の城壁と城壕、新砦早期の城壁、そして竜山晩期の城壕と城壁が確認されている。内壕内部には東西99.2m、南北14.5mの細長い浅穴式の建築基礎DFが発掘されている。この建物は土壁建築で柱穴がなく隔壁もない。土壁に屋根を架けた建物と考えられ、祭祀用の「壇」か「坎」の類で夏代初年に洧水の神を祭った場所とする説もある⁽²¹⁾。この城址自体は規模が大きく厳重に防御されていることから、夏后啓の居住地とする説やその居住した黄台の丘とする説、そして啓の都の夏邑とする説などがあり夏王朝初期の都城と見なす研究者が多い⁽²²⁾。

花地嘴遺跡 1992年に発見され、2001年、2003年、2004年に発掘が行われ、新砦期の遺跡であることが明らかになった。遺跡は四重の環壕に囲まれているが城壁は確認されていない。祭祀坑や玉製の鉞、鏹、璋、琮などの礼器が発見されており、遺跡の祭祀的性格が目される。

二里頭遺跡 1959年に徐旭生氏によって発見されて以来、現在にいたるまで社会科学院考古研究所の二里頭工作隊によって継続して調査、発掘されている。遺跡の分布範囲は西は北許村の東部、北は二里頭村、東は圪垯村、南は四角楼村を包み込むように広がっており、東西2.4km、南北1.9kmに達する（地図3）。劉慶柱氏の整理によると、遺跡の中心区は遺跡東南部から中部一帯に位置し、その中に宮殿区、銅器作坊区、玉石器作坊区、祭祀活動区、貴族聚居区を含むとする⁽²³⁾。遺跡東南部の宮殿区には大型の版築建築基礎がいくつも発見されているが、晩期には方形の宮城が築かれ、その外圍には直角に交叉する大道が廻らされていた。宮城の南部には規模の大きな緑松石製作場があり、宮城周囲には多数の中小の版築建築基礎が分布しており貴族の聚居区と見なされる。また、その附近には中型の墓葬が分布している。宮殿区の南200mに1万㎡

の銅器鑄造遺跡があり、溝が廻っていた可能性がある。祭祀活動区は宮殿区の北にあり、その範囲東西 2, 300 m 内には住居址や墓葬が含まれていた。そして、遺跡内の西部と北部には一般居住活動区があり、東部と西部にはそれぞれ骨器と陶器の制作場があったとしている。

二里头遺跡には従来、土壁で囲んだ宮城も、遺跡全体を囲む城壁も存在しないと考えられていた。ところが、2003



地図 3 二里头遺跡

年から 2004 年にかけて、これまで知られていた 1 号基址や 2 号基址を囲む形の宮城壁が発見され、それを井字形に囲む道路も確認された⁽²⁴⁾。また同時に宮城南側道路の南側にも土壁が発見され、緑松石や銅器の製作場を囲む圍牆が存在するのではないかと考えられている⁽²⁵⁾。その後、宮城内には 1 号や 2 号など四合院式の建築物の他に、6 号基址、4 号基址、5 号基址など異なった規格の建築遺跡が発見されている。5 号基址は 2010 年から 2011 年に発掘されたもので、今回の見学で二里头工作隊の趙海濤氏に案内してもらい説明を受けた。この基址は 2 号と 4 号基址の西部に隣接し、発掘後埋戻されて空き地になっていた (図 5)。東西 48 m、南北 47 m の版築台基の上に三棟の建物が庭を挟んで南北に並んで建てられていたとのことである。宮城内にはかなり密集して建物が存在していた可能性がある。

近年では、許宏、劉莉氏などによる二里头遺跡の時間的変遷をたどる試みもなされている⁽²⁶⁾。二里头一期の遺跡範囲は後の宮城部分の周囲にとどまっていた。しかし、二期から四期には上述のように最大規模まで拡大する。ただし、二期にはまだ宮城は存在せず、緑松石製作場附近に土壁が存在するだけであった。三期になると宮城が出現し、1 号、2 号、4 号基址が建設される。四期には 6 号基址、11 号基址が増設されるが、1 号基址は廃棄されて衰落に向かい、二里头崗期には遺跡は宮城部分の範囲にまで縮小するとしている。



図 5 二里头遺跡宮城 5 号遺址位置 (北に向かって)

二里頭工作隊の建物二階で趙海濤氏から二里頭遺跡の現状について説明を受けた。祭祀活動区は工作隊西の後漢墓の墳丘を中心とする東西 230 m、南北 100 ～ 200 m の範囲にあり、二里頭三期、四期の遺物が中心で「壇」か半地下式の「壇」が存在した。宮城南壁と道路を挟んだ南側の壁との間は 17 ～ 18 m ある。宮城南の土壁に囲まれた部分について、杜金鵬氏は工城あるいは工業城とするが圉垣作坊区とする説もある。宮城内の北東部、6 号基址の北では、取土坑、地下式房址、祭祀に用いた猪骨、陶片で舗装した路面が発見されており、祭祀場の可能性がある。遺跡の範囲の根拠について聞いたが、遺跡分布で推定したもので城壁は発見されていないとのことであった。また、二期から四期の遺跡範囲の東端では断続する坑が発見されており、南北一条に連なっているが溝ではないようである。しかし、竜山期から夏商期の都市遺跡にはほとんど城壁があり二里頭遺跡にないのは異例であり、城壁の探索は続けているとのことである。この他、洛河は現在二里頭遺跡の北側を流れているが、かつての伊洛河は南側を流れていたとの説明があった。なぜ二里頭遺跡は川に浸食されなかったかを訊ねたところ、遺跡の海拔は 119 ～ 120 m あって周りの土地より 1 ～ 2 m 高いとのことである。二里頭遺跡は微高地上にあり、川や人工の溝で防御されていた可能性があるが現在のところ何とも言えない。

二里頭遺跡の歴史的な位置づけについては、かつては湯都西亳説も主張されたが、近年では夏都斟鄩説が一般的で、太康から桀までの夏王朝中晩期の都城とされている⁽²⁷⁾。

大師姑城址 2002 年に発見され、2003 年に探査と発掘が行われた。その結果、二里頭期の城壁と城壕、殷代早期（二里崗下層）の環壕が発見された。遺跡の東部では二里頭期の大型建築基礎 F 1 も発見され、また玉琮も出土している。この城址については、夏王朝東境の軍事重鎮とする説と夏代の邦国の韋あるいは顧の都城とする説がある⁽²⁸⁾。

望京楼城址 望京楼は新鄭市の北郊にある戦国期の版築土台である（図 6）。土台は三段ほどになっており、台榭建築の基台と見られる。土台の周囲に溝が廻らされていることから戦国都市遺跡と考えられ、「函城」とも称されている。1974 年冬に望京楼の東南 100 余 m のところから二里



図 6 望京楼城址発掘現場（遠方望京楼）



図 7 望京楼城址発掘現場（遠方は孟家溝村。その手前は城門遺跡位置）

崗下層期の青銅器（爵、鬲、觚、鼎、罍）と玉戈が発見され、その後調査の結果、灰層、陶片、石斧、石鏃、墓葬などが発見され 5 万㎡に及ぶ殷代前期の遺跡であることが明らかになった⁽²⁹⁾。今回の調査でお世話になった河南省文物考古研究所の郝本性氏によると、この遺跡について鄒衡氏が早くから注目していたと言う。同研究所新鄭市工作站站長の樊温泉氏の話では、これまで何人もの考古学者がこの附近で都市遺跡の探査を行ったが発見できなかった。しかし、2010 年秋に若い女性の考古学者が掘り当てたと言う。今回、その当の女性考古学者、鄭州市文物考古研究院の呉倩氏から発掘現場で直接遺跡の説明を聞くことができた。望京樓城址は新鄭市から北に向かう道路（鄭新公路）の建設中に発見され現在も発掘中であるが、城門遺跡はすでに埋め戻されており二週間前なら見ることができたとのことである（図 7）。城門部分は内に窪んだ瓮城になっているが、城門前の堀は逆に出っ張った特殊な形をしており、防御に工夫が見られる。このような型式の城門の形成時期を聞きそびれたが、おそらくは殷代のものであろう。外側に二里頭期の城壁と城壕、内側に殷代の城壁と城壕が相互に接した形で確認されており、この城址は基本的に二里頭期の城址が殷代に改造して使用されたようである。城内には城門に対応するように道路が井字形に貫通していた。東城壁に二門発見されているので、城門が道路に対応すると仮定すると各城壁に二門づつ計八門あったことになる。東城壁の南の城門の道路を西に行ったところに内庭を有する二里崗期の大型版築基礎が発見されている。この建築物は洹北商城のものと同一型式であるとのことである。城内からは灰坑の他、墓葬も発見され、青銅器や陶器がかなり出土している。城址の外側東、南、西には川が廻っていて自然の防御線になっている。北側には人工の水路が掘削されていて二重の防御が施された都市遺跡と言うことになる。見学した時は、城内東南部で二箇所部分的に発掘されていた。上層を 2 m ほど剥がして灰坑部分を掘り進めていたが陶片の出土は少ないようであった。

遺跡の東に隣接した孟家溝村内の農家に発掘隊の基地が設けられており、そこで発掘された陶器を見せてもらった。仰韶期から戦国期にかけての陶器が出土しているが、二里頭期と二里崗期のものが最多とのことであった。二里崗期の灰坑や墓葬から出土した陶簋や陶杯の側面には帯状に饕餮紋が施されたものがあり青銅器を模倣したものと思われる。これらの陶器は殷代の望京樓城址の性質を考える上で重要であろう。

以上、新砦期から二里頭期、すなわち中国の学界では夏王朝の時期に存在したとされる都市遺跡を取り上げてきた。この時期の都市遺跡の特徴は、前の竜山期のものに比べて規模が大きなものが出現していることである。9 新砦城址は城牆内だけでも 70 万㎡あり、外壕内となると 100 万㎡に達するとされる。また明確な防御設備は確認されていないが、12 二里頭遺跡の範囲は 300 万㎡に及ぶ。そして、これらの大型の都市遺跡には祭祀施設が設けられていることも特徴である。新砦城址には「坎」あるいは「壇」とされる祭祀用の大型建築物が発見されており、二里頭遺跡には宮城の北には祭祀活動区があり、宮城内には祭祀場や宗廟と見なされる建築物が存在する⁽³⁰⁾。二里頭期には、もはや単なる軍事的な城塞ではなく宗教的な意味合いをもった都市

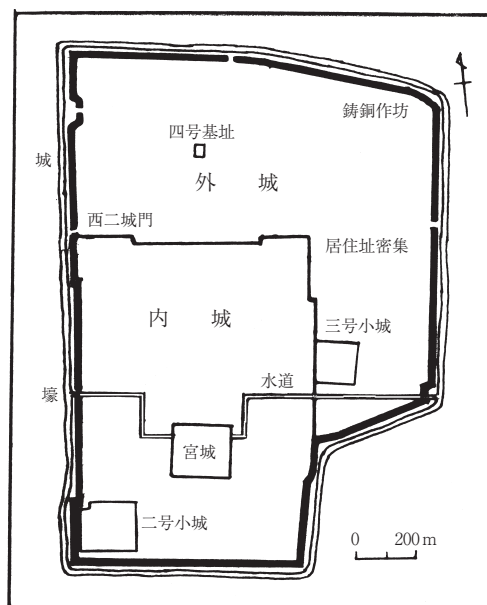
が明確に出現しているのである。董琦氏は、夏、商、周三代の時期を都市発展史の中で都邑時期と位置づけ、都市は城堡から政治、文化の中心、すなわち都邑に変質したとしている⁽³¹⁾。また、李麗娜氏も二里頭期は「万邦」林立の段階から、すでに文明と国家の段階に入っているとしている⁽³²⁾。ただし、ここで問題となるのは、次の殷代の都市と新砦期、二里頭期の都市をひとまとめに考えることができるかどうかである。改めて両者の比較検討が必要である。

二 殷代の都市

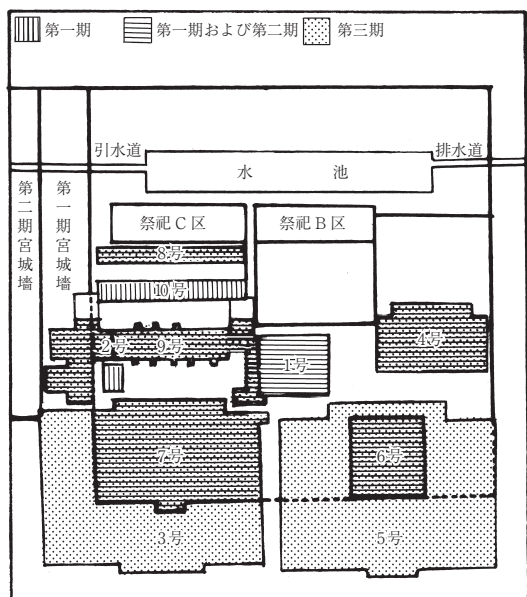
殷代の都市遺跡と見なされるのは、殷早期のものでは上述の13 滎陽大師姑城址、14 新鄭望京楼城址の他、15 偃師商城、16 鄭州商城、17 焦作府城城址がある。中期では早期から続く16 鄭州商城、17 府城城址と18 鄭州小双橋遺跡があり、後期では7 輝県孟庄城址、19 洹北商城、20 安陽殷墟があって、殷代を通して都市の様態を検討することが可能である。

偃師商城 1983年に発見されたばかりに発掘が開始された。その後も継続して発掘されたことによりしだいに城内の様相が明らかになってきた(地図4)。現在では外城の中に内城が存在し、内城内中心部やや南に宮城、西南隅に二号小城、内城東城壁外、外城内に三号小城が発見されている。外城城門は当初北城壁に1門、東西城壁に各3門存在するとされていたが、現在では西城壁は3門、東城壁は2門とされている⁽³³⁾。城内には幅6－10mの道路が11条、外城内東北部で鑄銅作坊遺跡が発見されている⁽³⁴⁾。

最も詳しく調査、発掘されているのは宮城内である(地図5)。王震中氏が宮城内の建築物に



地図4 偃師商城



地図5 偃師商城宮城内基址配置

について詳細に整理しているので、それにもとづいて紹介する⁽³⁵⁾。宮城は圍牆に囲われ南大半部分に 10 基の建築基址、その北に祭祀場と池苑が発見されている。10 基の建築基址の使用期間は時期によって異なっており、新築と廃棄、改築が行われている。使用期間は大体三期に分けることができるが、三期を通じて改築もなく使用されているのは 4 号基址だけである。王氏は基址の配置と性質は東部分と西部分とでは異なると考えている。東側の四合院型式の 4 号、5 号基址は宗廟とし、西側の 2 号、3 号、7 号、8 号、10 号基址を三つのグループに分けて「三進院落」、「三重殿堂」と称し宮殿建築とする。三グループの北辺の第一期 10 号基址、第三期 8 号基址を殷王室の寝室、中間の第一期 9 号基址、第三期 2 号基址を明堂、南辺の四合院型式の第一期 7 号基址、第三期 3 号基址の殿前の庭を内朝中の治朝としている。楊鴻郛氏は 2 号基址の西廡を「社」、「稷」、「壇」としているが⁽³⁶⁾、王氏は「社」ではあり得ないことを詳密に論証している。この他第二期まで存在した 1 号、6 号基址は他の基址より低い位置にあり厨房建築とされている。以上の基址群の北側には動物や人、農作物を用いた痕跡のある祭祀場があり、さらにその北には東西に渠道を附した長さ 130 m の長方形水池が発見されており、宮城内には様々な施設が密集していたようである。また、王氏によると宮城の西側に台基が数カ所確認され、南部にも版築建築基礎が発見されていることから、宮城の周囲には貴族の宮室が分布していたと推定している。

内城内西南隅の二号小城内には一列 16 基の版築基礎が一六列、全部で 96 の建築物が整然と配置されており、建物の構造から穀物倉庫群と考えられている⁽³⁷⁾。一方、外城内東部の三号小城も整然とした建物配置がみられ、こちらは武器庫ではないかとされている。このことから、この遺跡は軍事的要素の強い都市遺跡として注目されている。ただし、この二号小城北側では殷代の居住遺跡が密集して発見されており⁽³⁸⁾、この都市が単に軍事的な目的だけで建設されたものか一考が必要である。

偃師商城宮城は、同行の王震中教授、偃師市文物局の張鎖成氏、考古研究所商城考古隊の郭天平氏の案内で見学した。宮城は 2002 年 8 月に見学した時と同様に高い塼で囲われていたが、中に入ると一変して驚いた。以前はだだっ広い敷地に 4 号基址、2 号基址、8 号基址の上にコンクリートで基台が復原され、水池に水が張られて釣り堀になっていた。現在では 4 号基址のコンクリートが取り除かれ、その上に鉄骨の復原家屋が建設中であり（図 8）、その北は深く掘込まれやはり鉄骨の大きな展示室が建設中であつた。水池は水が抜かれ、他のコンクリートの復原基台は雑草に埋もれて荒れ果てた状態であつた。また祭祀場は牡丹栽培園になっていた。文物局の張氏の話では他の建物も復原するとのことであり、観光地化が推し進められているようであつた。

この他、偃師商城では三号小城跡と大城西城壁の西二城門復原場所を案内してもらった。三号小城跡は 2003 年開設の偃師市商城植物園の中になっていた。郭天平氏に東北角と東南角に案内してもらったが雑木林の中で目印も見当たらなかった。郭氏によるとボーリングで範囲を確認しただけで発掘していないと言う。南北向きに排房が並び二号小城と同じく府庫と思われるとの

ことであった。大城西城壁と城壕はほとんど全長にわたって幅 20 m 足らず、2 m 以上の高さで地上に復原されており、グーグルアースによってもはっきりと確認できる。西二城門の部分を見学したが門道の幅は 2 m くらいで非常に狭いという印象であった（図 9）。城門内側の舗装面には墓葬の位置が分かるようにしてあった。



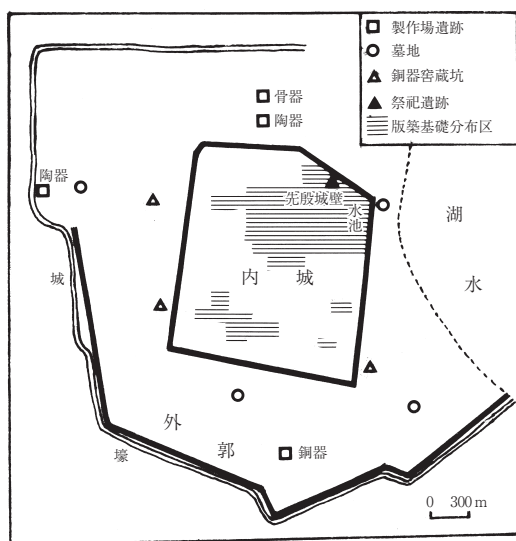
図 8 偃師商城宮城復元 4 号基址（建設中）



図 9 偃師商城復元西二城門（城内から）

偃師商城の歴史的な位置づけについては発見当初から論争が存在する。董琦氏は早い時点で成湯西亳説、太甲桐宮説、夏人復辟に備える重鎮説があるとしている⁽³⁹⁾。近年では、潘明娼氏は二里头遺跡、偃師商城、鄭州商城の相互の位置づけについて三種の観点に分けて整理している⁽⁴⁰⁾。第一は西亳の二里头遺跡から仲丁隰都の鄭州商城、そして盤庚殷亳の偃師商城へと遷都されたとする観点。第二は湯の亳都西亳である偃師商城から 150 年後に仲丁隰都である鄭州商城に遷都されたとする観点。第三は偃師商城と鄭州商城は並存したとする両京制の考えで、鄭州商城は湯の亳都で主都、一方偃師商城は太甲の桐宮か別都とする観点である。潘氏自身は第三の観点に立ち、偃師商城を夏の遺民を鎮撫するための軍事機能を有する陪都と見なしている。最近はこのような第三の観点が有力になりつつある。閻鉄成氏は、鄭州商城と同一時期かやや早い時期の城址で、湯王滅夏過程中に建設された軍事大本営であり、夏の遺民を監管する軍事重鎮かあるいは臨時の都としている⁽⁴¹⁾。また王震中氏によると、偃師商城は夏の遺民に備えるだけでなく、夏の正統を継承するため二里头遺跡の近辺に造営された王都であり、鄭州商城も王朝の統治が安定すると東方への拡大発展を意図して王都の機能を持たされるようになり王都が並存する形になるとする⁽⁴²⁾。しかし、仲丁の鄭州遷都とともに偃師商城は放棄され王都は一つになったとしている。王氏は両京制は否定するがやはり第三の観点に立っている。日本では松丸道雄氏が、偃師商城を夏王朝討征の主役であった伊尹が夏族反攻の監視を目的として築城したものとする説を出し、第三の観点到近い立場に立っている⁽⁴³⁾。そして、外城内の四号基址（Ⅳ号基址）を伊尹の墓と想定して外城はそれを営むためのものと考えている。偃師商城はやや特殊な存在として都市史の中に位置づけた方がよいのかも知れない。

鄭州商城 1955 年に発見されて以来、以後断続的に調査、発掘が進められている。内城の他、外郭も早くに確認されていたが、調査、研究が内城に集中されたため外郭が本格的に調査されるようになったのは 1986 年以後である。現在、外郭は南城壁と西城壁あわせて 3425 m が確認され、その外側に城壕も廻らされていたことが分かっている（地図 6）。城壕は西城壁の北にも伸び、さらに右折して東に続いていると推定されている⁽⁴⁴⁾。しかし、東城壁とその城壕は確認されず大きな湖水が存在することが明らかになっている。また 1985 年に内城の東北部で発見された版築牆基は内城内の宮城牆の可能性も考えられたが、その後の調査で二里頭期から二里崗下層、すなわち先殷から殷初にかけての城壁であることが明らかになった⁽⁴⁵⁾。現在、鄭州商城は殷王朝開始以前に造営され殷中期まで存続した都市遺跡と考えられている。



地図 6 鄭州商城

以下、王震中氏の整理に従って内城内と外郭内の状況を紹介する⁽⁴⁶⁾。内城内では当初東北隅に大面積の版築基礎が発見されたため、この地区に宮城が存在すると考えられたが、その後中部、南部にも版築基礎が多く発見され、内城は建築物で埋め尽くされていることが明らかになり、内城は宮殿区と見なされるようになった⁽⁴⁷⁾。ただし、内城内の建築物は破壊が嚴重で、偃師商城のように建築様式が分かるものがなく宮殿や宗廟の区別は困難である。内城東北部には殷中期の石板積みの貯水池が存在し偃師商城のものを継承している⁽⁴⁸⁾。同じく東北部には殷中期の加工人頭骨の堆積と祭石遺跡が発見されている。郝本性氏は加工人頭骨を「亳社」の祭祀に使用した後の廃棄物と考えたが、祭石遺跡は「石社」である可能性がある⁽⁴⁹⁾。内城の外、外郭内では小型房屋、墓葬、手工業作坊、人骨獣骨埋藏坑、青銅器窖藏坑が発見されている。手工業作坊としては鑄銅作坊、製陶作坊、製骨作坊が発見されており、殷中期には規模が拡大している。青銅器窖藏坑は三箇所発見されている。ともに二里崗上層二期（白家庄期）に下るものとされるので、鄭州商城末期に当たる。埋藏は丁寧に行われており、重大な政治動乱に際して草卒に埋藏したものではなく貴族の祭祀活動に関係するものと考えられている。

王氏は以上の整理を踏まえて、殷代にはすでに王室、貴族の居住する「城」と、手工業者と一般民衆の居住する「郭」の区別が出現していたとしている。しかし、外郭が完全な密封式になっていたか不確定なことからまだ結論を出すのは早いように思われる。同時代の都市遺跡に比べると内城が極端に大きく、外郭を含めると中国古代の都市遺跡中でも別格の大きさがなぜ要求され

たかの理由も考える必要がある。鄭州商城の位置づけは前後の時代を通した都市遺跡の展開の中で考える必要があり、春秋戦国時代の内城外郭式の都市と同一視することはできないように思われる。

鄭州では、河南省文物考古研究所の曾氏の案内で紫荆山路が南北に断ち切っている商城南城壁を見学した。数メートルの高さで保存されていて城壁断面を観察できるようになっていた(図10)。曾氏の話では中心部が殷代のもので両側が後代の補修であるとのことであった。附近では漢代の布目紋瓦を拾うことができた。また、東城壁あたりと思われるところに殷代の城壁が復原されており、高大な城壁が100 m以上続いていた(図11)。一部版築による構築法が分かるようにしてあった(図12)。ここでも殷代遺跡の観光地化が進められていた。

鄭州商城の歴史的な位置づけに対しては、偃師商城のところでも述べたように成湯の亳都とする説と仲丁の隰都とする説が対立しており、現在でも決着がついているとは言い難い。

府城城址 この遺跡はすでに1957年の調査で殷代から漢代までの遺物が発見され、殷代の城壁も確認されていた⁽⁵⁰⁾。その後、1991年にも調査されて城内に版築基礎も発見され、殷初から前漢まで使用された都市遺跡で殷代の雍邑、周代の雍国とされた⁽⁵¹⁾。1998年には版築基礎の部分が発掘され、一号、二号、三号、五号基址の相互関係と年代が判明した⁽⁵²⁾。二号基址は白家庄期のもので一号基址はそれより早い二里崗下層のもの、三号、五号は一号基址より早いとされた。城壁も調査により基址の年代と同じ二里崗期から白家庄期のものと確認された。一号基址は中央の正殿の南北に庭院があり、周りを北殿、南殿、配殿、回廊などが囲むかなり複雑な建築であった。王震中氏は、この城址を殷早期から中期の殷の諸侯クラスの



図10 鄭州商城城壁断面(右側が補修部分)



図11 鄭州商城復元城壁



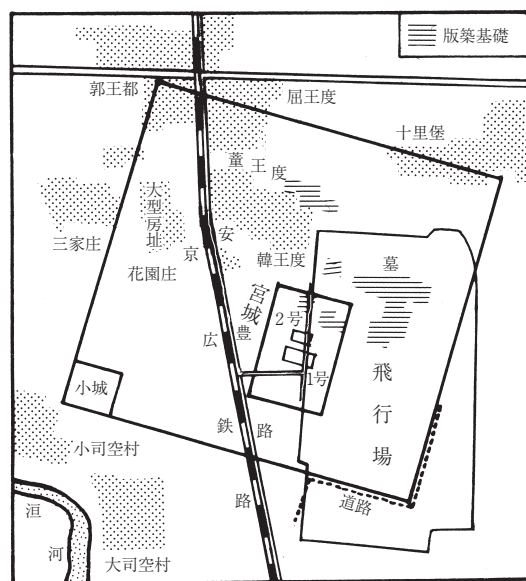
図12 鄭州商城復元城壁(版築法)

都邑とし、張新斌氏は殷代早期の邦国雍国の都邑としている⁽⁵³⁾。

小双橋遺跡 1989 年に発見、次年に試掘が行われ 1995 年に大規模な発掘が行われた。城壁は未確認であるが宮城牆の基槽が発見されている。また、版築の建築基礎群と高さ 9 m の版築土台、そして多数の祭祀坑が発見された。祭祀坑には人間を埋めたものと動物を埋めたものがあった。裴明相氏は西部の建築基礎を宗廟、東部の版築土台を燔柴祭祀の遺跡としている⁽⁵⁴⁾。大量の孔雀石や煉渣、焼土が出土しており青銅器鑄造が行われていたと考えられる。また青銅製の建築用裝飾部品が発見されていて殷王に関わる特別な建築物が存在したと推定される。

遺跡は二里崗上層から白家庄期のものとされ鄭州商城との関係が問題となる。劉效彬氏によると、仲丁隲都説、鄭州商城晩期の宗廟祭祀遺跡説、鄭州商城の離宮別館説がある⁽⁵⁵⁾。王震中氏は鄭州商城白家庄期の離宮別館で殷王外壬が造営したものとしている⁽⁵⁶⁾。

洹北商城 1999 年に城壁の基槽が発見され 2002 年まで発掘が行われた。また 2005 年から 2007 年にかけて大規模な調査が行われ、2008 年に 2 号基址が発掘されている。城内中央からやや東南寄りに城垣に囲われた宮城があり、城内西南隅に偃師商城と同じように小城が存在する（地図 7）。城内中北部には大規模な版築建築基礎、中東部には中小型版築建築基礎が発見されている。宮城内には版築建築基礎が 30 余箇所確認され、1 号基址と 2 号基址が発掘された⁽⁵⁷⁾。ともに庭院を囲む回字型の四合院式建築で、1 号基址は主殿と門塾前に祭祀坑が多数あることから宗廟と宮殿建築、2 号基址には祭祀の痕跡がないことから王室の生活



地図 7 洹北商城

に関わる建築とする考えがある⁽⁵⁸⁾。王震中氏も 1 号基址の主殿を宗廟とするが西配殿には屋根がないことから「社壇」としている⁽⁵⁹⁾。

洹北商城の城壁は未完成とされ、1 号基址は火災に逢った痕跡がある。王震中氏によると、洹北商城には盤庚の殷都とする説、河亶甲の相都とする説、河亶甲相都および盤庚殷都とみなす説がある。王氏自身は、遺跡は殷墟一期早段、すなわち盤庚、小辛、小乙期のもので盤庚遷都の殷都としてよく、小乙末年か武丁初年の大火災によって放棄され、洹河の南の殷墟に遷都されたとしている⁽⁶⁰⁾。

考古研究所安陽小屯工作站の何毓靈氏に洹北商城宮城を案内してもらった。安陽市街から北に向かう安豊路から東の脇道に入ると飛行場西側の金網に突き当たった。金網の外側は溝になって

おり平行して細い道路が南北に伸びていた。案内してもらった場所は1号基址、2号基址のあたりで、埋め戻されて一面畑になっていて耕作中であった(図13)。金網外側の溝には地層が露出しており、何氏の話では小石混じりの現代表土の下は戦国層であり、そのすぐ下が殷代層であるが下に埋まっていて現在は見るできないとのことであった。戦国層からは戦国瓦を採取することができ、その下部には殷代の紅焼土の小塊が混じっているのが確認できた(図14)。これも火災の証拠と思われた。何氏によると、殷代層の上になぜ直接戦国層が乗っているのか不明とのことであった。また何氏によると、城内中西部でも大型の建築遺跡が発見されており、さらに南城壁から東城壁に沿って外側に道路が確認されているとのことである。



図13 洹北商城宮城1号基址位置(北に向かって)



図14 洹北商城地層断面(戦国層)

殷墟 1928年に発掘が開始されてから、戦争による中断をはさみながら現在に至るまで調査、発掘が継続されている。殷墟とは、小屯村東北、洹河南の宮殿宗廟区とされる地域を中心に、西北の洹河北の王陵区や周辺の手工業作坊遺跡、墓地、住居址、祭祀坑等を含む東西6 km、南北5 kmの範囲を指すのが普通である(地図8)。

一般に宮殿宗廟区とされる場所は北側と東側は洹河、西側1100 mと南側800 mの大溝あるいは大灰溝と呼ばれる溝に囲われていて、その内部に53基の版築建築基礎群が確認されている。これらの建築基礎は北から南に甲組、乙組、丙組の三組に分類されている。王震中氏はこれらの性格について仔細に検討している⁽⁶¹⁾。乙組基礎は東側を洹河に浸食されているが、杜金鵬氏はそれを復原して四合院式の建築と見なしている。王震中氏はその考えをより進めて、南組四合院の乙二十を宗廟の正殿あるいは主殿とし、その北に寝室があり南に王庭があったとする。また乙八は北組四合院の西配殿か西室としている。丙組基礎については、丙一を大型土台とみなし、上部に小型土台を四方に配した四土四方の神を祭る祭壇としている。また王氏は、1981年に乙二十の南80 mで発見された大型建築基礎を武丁早期の宗廟建築ではないかとしている。建築基礎群を囲む大溝については、近年宮殿宗廟区を防御する施設ではないとする説が出されている。唐際根氏らは大灰溝を取土や蓄水溝が連結したものとし⁽⁶²⁾、王氏も防御施設とすることに疑問

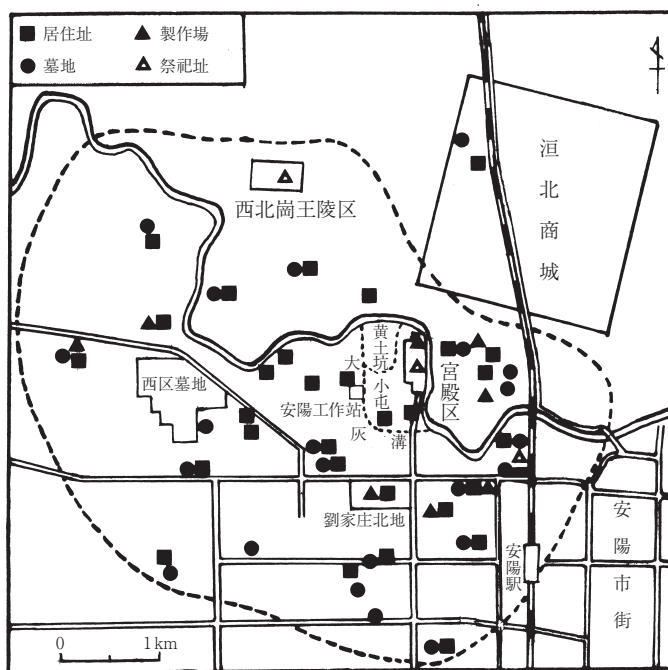
を呈し宗廟宮殿区を大灰溝の外、小屯村の西北や西に広げるべきだとし、北側の大黄土坑を宮殿区内の池苑遺跡としている⁽⁶³⁾。

西北崗の王陵区には大墓が13基発見されており、うち四墓道の大墓は武丁から帝辛までの王墓と考えられている。1400号墓の周辺では斬首死体や人頭骨を放り込んだ人身犠牲の祭祀坑が千数百確認されており、王陵区は特別な祭祀場であったことが分かる。

手工業作坊遺跡は宮殿宗廟区内でも発見されている

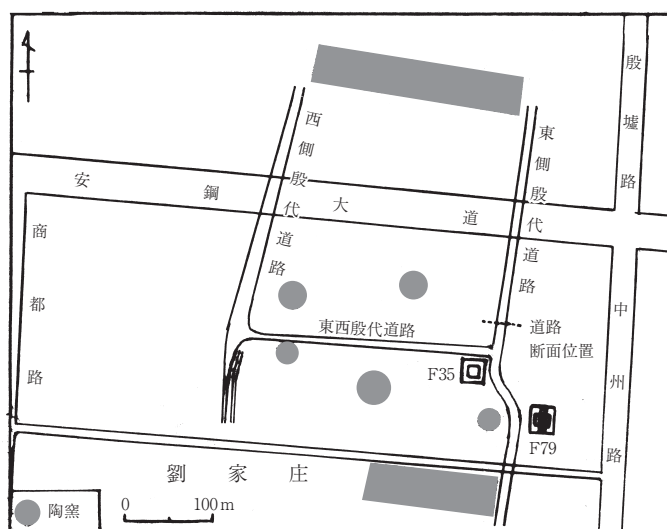
が、多くは周辺地域に分散的に存在する。宮殿宗廟区の甲組建築基礎北部で玉器の原料を埋蔵した坑や骨器の半製品、磨石が発見されており、王室管理の作坊区が存在したと推定されている⁽⁶⁴⁾。周辺地域では規模の大きい銅器製造作坊5箇所、骨器製造作坊3箇所、玉器製造作坊1箇所が発見されており、陶器を製造した窯跡は小規模なものが分散的に分布している。これら作坊遺跡の近辺には住居址や墓地が存在している。また一般に、住居址や墓地はセットで発見される場合が多く集団居住地が存在したと考えられている。鄭若癸氏はこのような集団居住地を族邑と呼んでいるが、王震中氏は族居と呼んで王室に家族単位で仕官してきた場合が中心であったとしている⁽⁶⁵⁾。

近年、殷墟でその都市としての構造を考える上で注目されているのは、宮殿宗廟区南部の劉家庄北地で2008年に発見された道路である⁽⁶⁶⁾。道路は南北に平行して伸びる幅10 m以上の大道二本とそれを東西に結ぶ道路が一本発見されている。これら道路と周辺の発掘の現状について、安陽小屯工作站の研究室で何毓璽氏からパソコンの画面によって説明を受けた。現在、東側の道路南部周辺と東西道路東部周辺の広大な地域を全面的に発掘している（地図9）。陶窯が各所で発見されており、道路の近くにはF35とF79の大型建築物を発掘した。ともに四合院式で礎石を備えた建築物である。F79は真ん中に南北の通道があり、北側の門の下には排水管道が設置され近くに池が確認されている。道路は周りの土地より低くなっており、幅は5～14 mで厚さは15 cmある。道路の表面は小石、陶片、骨片で舗装されていて車軌の痕跡がある。道路の用途は



地図 8 殷墟と洹北商城

宮殿区から南方に軍隊が出征するためのもので、洹北商城の南方に向かう道路と類似しているとのことであった。現在の安陽市街の下に殷の都城が埋もれているとの説があり、道路はそれと関係するのではないかと訊ねたが、安陽市街を4いくら掘っても殷の都城に関わる遺物、遺跡は出てこないとの答えであった。何氏からは、この他に殷墟出土の最新の遺物の情報も聞いた。1998年、2009年、2010



地図9 劉家庄北地殷代道路

年に殷代の青銅製印章が出土していること、直径1.61mの鑄造用の盤の范心が発見されたこと、そして罫線入りで文字に墨が塗布された甲骨の発見も紹介され写真も見た。同行の王震中氏によると、この甲骨は卜問ではなく記録の可能性があるとのことであった。

劉家庄北地の発掘現場は工作站的岳占偉氏に案内してもらった(図15)。安銅大路から発掘現場の北側に入るとすでに現場はグリッドの畔が取り払われていて東西の道路が見渡せた。発掘場所の下に降りて東側大道の断面が分かる場所に案内された。道路部分は低くなっていて両側は斜面になっている(図16)。岳氏は人夫を呼んで道路の断面がよく分かるようにスコップで削らせた。保護用の土層の下には確かに薄く小石や陶片の層があり下部は堅く突き固められているようであった(図17)。東側道路を南に歩いて行くと右手の一段高いところに雨から守るために



図15 殷墟劉家庄北地発掘現場



図16 劉家庄北地東側道路(北に向かって。左手に斜面)



図 17 劉家庄北地東側道路断面



図 18 劉家庄北地陶窯跡断面

大きくシートをかぶせた F 35 があった。その東の道路よりも一段高いところには白い川原石の礎石が散在しており、建築物は道路より高いところに作られていたようである。この附近のグリット断面に土器片を投げ込んだピットの傍に陶窯が露出しており、岳氏は陶窯の焼けた壁面が分かるように人夫に土を削らせた（図 18）。この後東に向かい、発掘中の宋代磚室墓を通り過ぎ F79 を見た。F79 もシートがかぶせられ形状を見ることはできなかったが、そばに焼けた土塊が発掘されているところがあり、岳氏によると焼けて倒壊した建築物の壁の一部であるとのことであった。このあと北に向かったが至るところに礎石が散在しており、多くの建物が存在していたことが想像できた。また子供の骨がのぞいている甕棺もあった。この他西北から東南方向に掘られた、かなり深い排水溝も二本発掘されていた（図 19）。劉家庄北地のあたりは、道路や水路が張りめぐらされ、大型の建築物を含む建築物が多く建ち並ぶ、殷墟でも重要な地域であったと考えられる。



図 19 劉家庄北地排水溝

殷墟の性格については古くから論争がある。中国では殷晩期の王都と考えるのが一般的であるが、日本では早くから宮崎市定氏や伊藤道治氏のように都城ではないとする説があり、最近では松丸道雄氏が殷墟は王室専用の聖地であり王城は現在の安陽市街の下にあるはずだとの説を称えている⁽⁶⁷⁾。中国でも秦文生氏がすでに殷墟都城否定説を主張しており、近年では閻鉄成氏が殷後期の都城を鄭州小双橋遺跡とする説を出している⁽⁶⁸⁾。一方、王震中氏は宮殿区から伸びる南北の道路の発見や族居間の道路の存在から殷墟は王都として一体の構造を有しているとし、宮城や外郭は将来の考古発見を待つべきだとしている⁽⁶⁹⁾。

以上殷代の都市遺跡を見てきたが、二里頭期よりさらに巨大な都市遺跡が出現している。そし

て、早期から中期の偃師商城や鄭州商城のように明確な外郭を有する都市が現れ防御が強化されている。これらの都市の造営目的について、周書灿氏は、殷が夏の中心地区を政治的、軍事的に統御し権力を強固にするためであったとしている⁽⁷⁰⁾。しかし、殷中期の小双橋遺跡や後期の殷墟の方は二里頭遺跡と同様、いまだ城壁が確認されておらずその理由を考える必要がある。この他、城内や宮城内には二里頭遺跡に見られるような回字型の四合院式建築物が普通に見られ、それらは宗廟に比定されている。また殷代の都城とされる遺跡には「社」とみなされる祭祀遺跡が見られるのも特徴である。殷代の都市、とくに都城とされる都市の中心部には必ず宗教的な施設が存在することは注意される必要がある。

三 西周期の都市

西周期の都市遺跡として限定できるものは全国的にも少なく、河南省中心部において検討材料となりうるものは21 成周、22 漢魏故城、23 鄭州娘娘寨城址くらいである。

成周 周公が造営した洛邑、すなわち成周がどこにあったかは古くから問題になっている⁽⁷¹⁾。近年で最も有力な候補地は、洛陽老城の東、瀍河兩岸の地域である。この場所には、1960 年代から70 年代にかけて瀍河西岸の北窯村で西周貴族墓地が発掘され、1974 年には貴族墓地の南隣で大規模な西周期の銅器鑄造作坊遺跡が発見された⁽⁷²⁾。作坊遺跡では住居址や祭祀坑、大型道路も発見されている。また貴族墓地の西南では平民の墓地も確認されている。一方、瀍河東岸では殷人の墓が常に発見され、車馬坑や祭祀坑も発掘されている。しかし、城壁や城壕、そして大型建築物の版築基礎は発見されていない。

葉万松氏らは、文献には周公が王城と成周の二城を造営したことになっているが、考古学的には一城説が有力でその地は瀍河兩岸の可能性が高いとする⁽⁷³⁾。そして、瀍河東岸の殷人墓は『書序』に見える成周完成後に移された「殷頑民」のものと思なされるとしている。劉富良、梁雲、胡進駐、徐昭峰氏らも瀍河兩岸成周説で⁽⁷⁴⁾、徐氏は城壁がないのは西周初年は国力が強盛であったために必要がなかったと考えている。

漢魏故城 洛陽市の東15kmにある漢魏洛陽故城で1984年に城壁の試掘が行われ、故城の東城壁および西城壁の中段は西周中晩期より遅くないとされた⁽⁷⁵⁾。しかし、この都市遺跡をどのように評価するかは意見が分かれている。梁雲氏は、この城壁を春秋早期か两周の際のものとし、平王は東遷後、澗河東岸に新城「成周」（「王城」とも呼ばれた）を建設すると同時に漢魏故城の位置に諸侯の軍隊を駐屯させるため「翟泉」城を築いたとしている⁽⁷⁶⁾。一方、徐昭峰氏は、劉富良氏の研究を踏まえ、西周晩期に宣王が南淮夷の攻勢に対処するため瀍河兩岸の成周城を放棄して險要の地であるこの地に築城したと考えている⁽⁷⁷⁾。また、胡進駐氏はこの都市遺跡を西周時の高級貴族の居所としている⁽⁷⁸⁾。しかし、城壁内部の調査が全く行われておらず、どのような性質の都市かは明らかでない。

娘娘寨城址 2004 年に鄭州市西北 18km ところで発見された都市遺跡である。馬世之氏によると、内城は方形で外城内西北部の高さ 4 m の土台上にあり、西周晩期の始建で城門や道路、陶窯、墓葬、水井が発見されているとしているが⁽⁷⁹⁾、版築の建築基礎は確認されていないようである。外城は、長方形で西南部に西周墓が 500 余基発見されていて、発掘した 9 基の副葬陶器には殷文化の要素が濃厚であるとされており⁽⁸⁰⁾、馬氏は春秋時期始建で戦国時に拡張されているとしている。また馬氏によると、この都市遺跡の性格について東虢城説、管城説、鄭国東遷都邑説があるとし、自身は桓公東遷時の鄭国軍政府所在地と見なし都城であったのは 10 年近くに過ぎないとしている。グーグルアースの衛星写真を見る限り城壁らしきものは確認できない。河南省文物考古研究所の郝本性氏に聞いたところ、娘娘寨の村庄のところが内城であるが外城ははっきりしないとのことであった。また使用時代も長く様々な説があるとのことである。

この他、河南省中心部において春秋戦国期の都市遺跡で西周期まで遡るとされるものはいくつか知られているが、西周期の具体的遺構が確認されているものは皆無である⁽⁸¹⁾。また西周期と限定されている他の都市遺跡も具体的な遺構の報告がなされておらず検討材料とはなりえない⁽⁸²⁾。河南省中心部の西周都市の具体的様相は現在のところ明らかにしがたいと言わざるをえない。

むすびにかえて

河南省の中心部では、竜山中期になると小規模な軍事城塞が林立する状況が出現した。このような状況は、その隣の山東省や湖北省でも見られ、かなり広範囲に出現した現象である。ところが、次の新砦期や二里頭期になると宗教施設をそなえた大型の都市の出現が見られる。このことからこの時期に国家の出現が予想され、王城崗大城、新砦城址、二里頭遺跡など大型都市遺跡はみな夏王朝の都城と結びつけられている。都城以外の地方都市には孟庄城址、蒲城店城址、鄭州商城の先殷部分など小規模なものが引き続き見られる一方、花地嘴遺跡、大師姑城址、望京樓城址などかなり規模が大きく、また防御の固い都市遺跡も出現している。この時期、都市にはいくつかのランクが存在していた可能性があり、中核都市を中心に新しい支配の枠組みが形成されつつあったと見なしてよいかもしれない。同じく竜山期に小規模な都市が林立する河南省以外の地域ではどのような動向が見られるのか改めて検討する必要がある。

殷代になるとさらに巨大な都市が出現する。早期や中期には外郭を備えた偃師商城や鄭州商城が存在し、後期初の洹北商城も長大な城壁を備えている。これらはみな殷の都城と考えられている。しかし、一方では巨大で都城に比定されるが城壁が確認できない小双橋遺跡や殷墟なども存在する。河南中心部においては、王都以外の地方都市としては、望京樓城址以外、小型の孟庄城址や府城城址などしか発見されていない。次の西周期の都市は殷代の都市と春秋戦国期の都市を繋ぐ上で重要であるが、河南中心部においては王都、地方都市とも都市遺跡の詳細はほとんど分

からない。

殷代を中心とする都市については、春秋戦国期の都市との比較においていくつかの論点が存在する。まず第一は外郭内や宮城外の城内の居住者や手工業作坊の性格の問題である。偃師商城や鄭州商城の外郭内には居住遺跡や手工業作坊が確認されている。これらが内城の統治者とのような関係を取り結んでいたかが問題となる。春秋戦国期の外郭は都市の経済的な発展の結果形成されたと考えられるが、殷代の外郭はどのような理由から設けられたのであろうか。第二は城壁などの防御施設が確認できない都城が目立つ点である。二里頭遺跡、小双橋遺跡、殷墟、成周は都城と見なされるが城壁も城壕も確認されていない。春秋戦国期の都市遺跡には、秦都咸陽以外はほとんど例外なく城壁が存在し、とくに都城においては内城の他に外郭も見られる。上述のように成周に城壁のないのは国家の強盛によるとする考えがあり、二里頭遺跡の場合は軍事防御体系の重点は周辺地区の都市にあったとする説もある⁽⁸³⁾。しかし、かなりの都城に城壁の不在が見られる点、軍事的な側面からだけ考えるのは問題であろう。都城の開放性の積極的な意味を考える必要がある。第三は地方都市の特質及びそれらと王都との関係の問題である。春秋戦国期には河南省の中心部においては都城以外にも巨大都市が隣接して存在していた⁽⁸⁴⁾。そして、これらの都市は軍事的、経済的に独立傾向を有しながら相互に関係しあっていたと考えられる。しかし、殷周時代においては、この地域の王都以外の地方都市遺跡の調査、発掘がいまだ不十分であるため都市間の関係は現在のところ明らかにしがたい。春秋戦国期の都市との比較には今しばらく資料の蓄積を待つ必要がある。

注

- (1) 拙稿「古代都市社会」(『殷周時代史の基本問題』汲古書院、2001年)。ただし、本書の公刊が遅れたため、用いた考古学的な材料は1998年頃までのものである。
- (2) 拙著『春秋戦国秦漢時代出土文字資料の研究』(汲古書院、2000年)第二部第二章、第三章、同『戦国時代の都市と国家－考古学と文献史学からのアプローチ』(白帝社、2005年)。
- (3) 平成23年度科学研究費補助金・基盤研究(C)、研究課題「古代都市社会形成論」。今回の河南省内の調査には、社会科学院歴史研究所副所長の王震中教授と山東大学歴史文化学院の張昀講師に特別の協力を仰いだ。
- (4) 戦国時代を中心に都市の発達する地域は洛陽市以東、淮水以北の河南省中部から山東省西部および山西省中南部である。とくに河南省中部は都市発達の核地域とすることができる。また、この地域には殷周時代に偃師商城、鄭州商城、殷墟、成周など都城が置かれている。
- (5) 以下、城址の番号は「河南竜山・二里頭・殷周都市遺跡表」の番号。各都市遺跡の根拠資料は末尾の「河南竜山・二里頭・殷周都市遺跡表出典一覧」参照のこと。
- (6) 李麗娜「中原地区虞夏時期城址の比較研究」(中原文物2009-4)頁41。なお秦文生氏は東夷集団中の虞氏帝舜の都城としている(「舜都于淮陽平糧台竜山文化古城考」中原文物1991-4, 頁45)。
- (7) 李先登「登封告成王城崗遺址の初歩分析」(中国考古学会第四次年会論文集(1983))頁7、安金槐「試論登封王城崗竜山文化城址与夏代陽城」(同上)頁1。
- (8) 京浦「禹居陽城与王城崗遺址」(文物1984-2)頁67、董琦「王城崗城堡遺址分析」(文物1984-11)頁69。
- (9) 方燕明「登封王城崗城址の年代及相關問題探討」(考古2006-9)頁16。馬世之氏は小城は禹が舜の子、商均

- を避けて居住した陽城でもあるとしている（「登封王城崗城址与禹都陽城」中原文物 2008 - 2、頁 22）。ただし、程平山氏は小城は鯀の作城ではなく大城の方が鯀都陽城であり禹都陽城ではないとしている（「登封王城崗遺址性質分析」考古与文物 2009 - 5、頁 52）。
- (10) 注 (6) 李麗娜論文、頁 41。
- (11) 李麗娜氏は河南省の竜山期城址として濮陽高城を、魏興濤氏は濮陽戚城を取り上げているが（注 (6) 李麗娜論文、頁 42、魏興濤「中原竜山城址的年代与興廢原因探討」華夏考古 2010 - 1、頁 49）、詳細は不明であり、ここでは取り上げなかった。
- (12) 梁曉景「鄧国史跡探索」（中原文物 1987 - 3）頁 102。
- (13) 杜金鵬「新密市古城寨竜山文化大型建築基址研究」（華夏考古 2010 - 1）頁 61。
- (14) 袁広闊「孟庄竜山文化遺存研究」（考古 2000 - 3）頁 21。
- (15) 董琦「中国先秦城市發展史概述」（中原文物 1995 - 1）頁 73。
- (16) 注 (11) 魏興濤論文、頁 56。
- (17) 注 (6) 李麗娜論文、頁 46。
- (18) 呉文祥「“ 限制理論 ” 与中国古代文明誕生」（華夏考古 2010 - 2）頁 143。
- (19) 中国社会科学院考古研究所河南新砦隊、鄭州市文物考古研究院「河南新密市新砦遺址 2002 年發掘簡報」（考古 2009 - 2）頁 3。
- (20) 龐小霞、高江濤「關於新砦期遺存研究的幾個問題」（華夏考古 2008 - 1、頁 73）は新砦期と二里頭一期から四期までを合わせて夏文化としている。また、趙春青、張松林「新砦聚落考古的回顧与展望」（中原文物 2010 - 2、頁 30）も、新砦期を代表する新砦遺址第二期の絶対年代は紀元前 1850 ～ 1750 年で最も早い夏文化ではなくさらに遡るとしている。
- (21) 周書灿「新密新砦城址中心区大型浅穴式建築的性質再思考」（華夏考古 2011 - 1）頁 67。
- (22) 趙春青「新密新砦城址与夏后啓之居」（中原文物 2004 - 3）頁 12、許順湛「尋找夏啓之居」（同上 2004 - 4）頁 46、馬世之「新砦遺址与夏代早期都城」（同上 2004 - 4）頁 51。張国硯氏も夏啓時期の政治中心地としている（「夏国家軍事防御体系研究」中原文物 2008 - 4、頁 40）。
- (23) 劉慶柱「中国古代都城遺址布局形制的考古發現所反映的社会形態变化研究」（考古学報 2006 - 3）頁 281。
- (24) 中国社会科学院考古研究所二里頭工作隊「河南偃師市二里頭遺址宮城及宮殿区外圍道路的勘察与發掘」（考古 2004 - 11）頁 3。
- (25) 許宏、劉莉「關於二里頭遺址的省思」（文物 2008 - 1）頁 45。
- (26) 注 (25) 許宏、劉莉論文、頁 43。
- (27) 李麗娜氏は偃師商城發見以後、大多数の研究者は夏都斟鄩説に賛同しているとしている（注 (6) 論文、頁 42）。劉慶柱氏は夏王朝中晩期の都城で晩期は殷代に入るとし（注 (23) 論文、頁 728）、趙国硯氏も夏都斟鄩としている（注 (22) 論文、頁 40）。
- (28) 鄭州市文物考古研究所『鄭州大師姑（2002 - 2003）』（科学出版社、2004）頁 338。
- (29) 新鄭県文化館「河南新鄭県望京楼出土的銅器和玉器」（考古 1981 - 6）頁 556、金岳「河南新鄭望京楼銅器断代」（考古 1985 - 5）頁 468。
- (30) 杜金鵬氏は 2 号基址を宗廟、その南の 4 号基址を特殊な祭祖典礼の場所とみなしている（「偃師二里頭遺址 4 号宮殿基址研究」文物 2005 - 6、頁 69）。
- (31) 注 (15) 董琦論文、頁 74。
- (32) 注 (6) 李麗娜論文、頁 46。
- (33) 中国社会科学院考古研究所河南第二工作隊「一九八三年秋季河南偃師商城發掘簡報」（考古 1984 - 10）頁 872、同「河南偃師商城西城牆 2007 与 2008 年勘探發掘報告」（考古学報 2011 - 3）頁 385。
- (34) 中国社会科学院考古研究所河南第二工作隊「河南偃師商城東北隅發掘簡報」（考古 1998 - 6）頁 1。
- (35) 王震中『商代都邑』（中国社会科学出版社、2010）頁 15 ～ 130。
- (36) 王氏は楊鴻勛『宮殿考古通論』（紫禁城出版社、2001）を引用しているが、近年楊氏は「古蜀大社（明堂・昆倉）考」（文物 2010 - 12、頁 80）でも主張している。
- (37) 中国社会科学院考古研究所河南第二工作隊「偃師商城第Ⅱ号建築群遺址發掘簡報」（考古 1995 - 11）頁 963。

- (38) 中国社会科学院考古研究所河南第二工作隊「河南偃師商城Ⅳ区 1996 年發掘簡報」(考古 1999 - 2) 頁 12。
- (39) 董琦「偃師商城年代可定論」(中原文物 1985 - 1) 頁 54。
- (40) 潘明娟「從鄭州商城和偃師商城的關係看早商的主都和陪都」(考古 2008 - 2) 頁 55。
- (41) 閻鉄成「商代殷都考」(中原文物 2009 - 1) 頁 31。
- (42) 注 (35) 王震中書、頁 54。
- (43) 松丸道雄「關於偃師商城和伊尹關係的假說」(『三代考古』(三)、科学出版社、2009) 頁 176。
- (44) 河南省文物考古研究所「鄭州商城外郭城的調查与試掘」(考古 2004 - 3) 頁 40。
- (45) 河南省文物考古研究所「河南鄭州商城宮殿区夯土牆 1998 年的發掘」(考古 2000 - 2) 頁 40。
- (46) 注 (35) 王震中書、頁 131 ~ 147、頁 227 ~ 245。
- (47) 袁広闊、曾曉敏「論鄭州商城内城和外郭城的關係」(考古 2004 - 3) 頁 59。
- (48) 杜金鵬「試論商代早期王宮池苑考古發現」(考古 2006 - 11) 頁 55。
- (49) 祭土遺跡について、謝肅氏も社祀遺跡と考え(『簡論商代的社』中原文物 2008 - 5、頁 47)、鄭築祥氏も祭社遺跡と見なして、東北隅の王宮と宗廟である大型建築基址群とで宗廟と社稷の關係にあるとしている(『鄭州商城社祭遺址新探』中原文物 2010 - 5、頁 28)。
- (50) 李德保等「焦作市發現一座古城」(文物參考資料 1958 - 4) 頁 74。
- (51) 楊貴金、張立東「焦作市府城古城遺址調查報告」(華夏考古 1994 - 1) 頁 1。
- (52) 袁広闊、秦小麗「河南焦作府城遺址發掘報告」(考古學報 2000 - 4) 頁 501。
- (53) 注 (35) 王震中書、頁 192、張新斌「商代邢都初探」(中原文物 2008 - 6) 頁 32。
- (54) 裴明相「論鄭州市小双橋商代前期祭祀遺址」(中原文物 1996 - 2) 頁 4。
- (55) 劉效彬等「鄭州小双橋遺址出土長方形穿孔石器的岩相特徵」(華夏考古 2009 - 2) 頁 93。
- (56) 注 (35) 王震中書、頁 263。
- (57) 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊「河南安陽市洹北商城宮殿区 1 号基址發掘簡報」(考古 2003 - 5) 頁 17、同「河南安陽市洹北商城宮殿区二号基址發掘簡報」(考古 2010 - 1) 頁 9。
- (58) 唐際根、荆志淳、何毓靈「洹北商城宮殿区一、二号夯土基址建築復原研究」(考古 2010 - 1) 頁 23。
- (59) 注 (35) 王震中書、頁 286。
- (60) 注 (35) 王震中書、頁 268、273、292。陳旭氏は洹北商城を盤庚遷殷の都城とするが、宮殿火災によりまず王室が洹南小屯に遷り、住民は大部分遅れて移住したとする(「關於“盤庚遷殷”問題的一点想法」中原文物 2011 - 3、頁 24)。
- (61) 注 (35) 王震中書、頁 367 ~ 395。
- (62) 唐際根、荆志淳「安陽的“商邑”与“大邑商”」(考古 2009 - 9) 頁 70。
- (63) 注 (35) 王震中書、頁 330 ~ 332、410 ~ 411。中国社会科学院考古研究所安陽工作隊「2004 - 2005 年殷墟小屯宮殿宗廟区的勘探和發掘」(考古學報 2009 - 2、頁 217) も大黄土坑を池苑遺跡ではないかとしている。
- (64) 注 (63) 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊報告、頁 245。
- (65) 鄭若葵「殷墟“大邑商”族邑布局初探」(中原文物 1995 - 3) 頁 84、注 (35) 王震中書、頁 353 ~ 359。
- (66) 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊「河南安陽市殷墟劉家庄北地 2008 年發掘簡報」(考古 2009 - 7) 頁 24。
- (67) 宮崎市定「中国上代の都市国家とその墓地 - 商邑は何処にあったか」(『アジア史論考(中)』朝日新聞社、1976) 頁 31、伊藤道治「安陽小屯殷代遺跡の分布復原とその問題」(東方學報 29、1959) 頁 339。松丸氏の説は日本中国考古学会 2010 年度大会(2010 年 11 月 27 日、奈良市、平城宮資料館)で発表された。
- (68) 秦文生「殷墟非殷都再考」(中原文物 1997 - 2) 頁 51、閻鉄成「商代殷都考」(中原文物 2009 - 1) 頁 28。
- (69) 注 (35) 王震中書、頁 352。
- (70) 周書灿「早商時期經營四土之考古学新証」(考古与文物 2011 - 1) 頁 36。
- (71) 伊藤道治「先秦時代の都市 - その一、考古学的に見た都城 -」(神戸大学・研究 30、1963) 頁 43、頁 50。
- (72) 洛陽博物館「洛陽北窑村西周遺址 1974 年度發掘簡報」(文物 1981 - 7) 頁 52。
- (73) 葉万松、張劍、李德方「西周洛邑城址考」(華夏考古 1991 - 2) 頁 70。
- (74) 劉富良「洛陽西周陶器墓研究」(考古与文物 1998 - 3) 頁 44、梁雲「成周与王城考弁」(考古与文物 2002 - 5) 頁 51、胡進駐「關於洛陽周都与東周王陵的幾個問題」(考古与文物 2006 - 5) 頁 71、徐昭峰「成周与王城考

- 略」(考古 2007 - 11) 頁 62。
- (75) 中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏城隊「漢魏洛陽古城城垣試掘」(考古學報 1998 - 3) 頁 361。
- (76) 注 (74) 梁雲論文、頁 52。
- (77) 注 (74) 徐昭峰論文、頁 63。
- (78) 注 (74) 胡進駐論文、頁 71。
- (79) 馬世之「娘娘寨城址性質問題試探」(中原文物 2010 - 5) 頁 39。
- (80) 鄭州市文物考古研究所「河南滎陽娘娘寨城址西周墓葬發掘簡報」(文物 2009 - 9) 頁 4。
- (81) 平成 20 年度科学研究費補助金・基盤研究 (C) 研究成果報告書『春秋戦国秦漢時代の都市とその周辺』(研究代表者: 江村治樹、2009) 頁 92「春秋戦国秦漢都市遺跡表 3 河南省」参照。
- (82) 例えば、滎陽平桃城(楊育彬『河南考古』(中州古籍出版社、1985) 頁 494)、新密密国故城(国家文物局主編『中国文物地図集 河南分冊』(中国地図出版社、1991) 頁 46)、鄭州管邑(程平山、周軍「商周管邑地望考略」中原文物 2000 - 4、頁 21) など。
- (83) 注 (22) 張国硯論文、頁 40。
- (84) 注 (81) 江村治樹報告書、頁 11。

河南竜山・二里头・殷周都市遺跡表

*印：城牆未発見

城址名	所在地	考古年代	規模（東西×南北）	面積・周長	城内状況
1 郝家台	鄆城	竜山中期偏早	250 × 260m	6.5 万㎡	城牆、城門1、成排房基、灰坑、陶窯、水井、墓葬（瓮棺葬あり）
2 後岡	安陽	竜山中晚期	70m-	10 万㎡	城牆、円形白灰面房址
3 徐堡	温県	竜山中晚期	500m（南）	20 万㎡	城門2（西1, 東1）、堆築台地 90 × 70m・6000 ㎡、灰坑、陶窯、墓葬
4 西金城	博愛	竜山中晚期		30.8 万㎡ 2000m	城門2（西1, 南1）、城壕、高土崗 3 万㎡
5 平糧台	淮陽	竜山晚期	185 × 185 m	3.4 万㎡	城門2（北1, 南1）、周壕、陶排水管、房基（F4 土塊高台建築）、陶窯、墓葬（瓮棺葬あり）、灰坑、祭祀坑、銅渣
6 古城寨	新密	竜山晚期（王湾三期）	500 × 370 m		城門2（北1, 南1）、城壕、大型建築址（四合院型式）、灰坑、墓葬
7 孟庄	輝県	竜山中晚期 二里头期・殷後期補修	340m（北）、375m（東）	12.7 万㎡	城門1（東）、城壕、房基、灰坑、小井、墓葬
8 蒲城店	平頂山	竜山中晚期（王湾二期～）	264m（南）、124m（南北）	2.65 万㎡	城牆、城壕、房址 F39（門道、灶、散水、排水路）、灰坑、陶窯
		二里头早期	260 × 204m	5.2 万㎡	城牆、城壕、城外に房址、灰坑、墓葬
9 新砦	新密	竜山晚期 新砦期 二里头早期	927m（北）、70m（西）	城牆内 70 万㎡／外壕内 100 万㎡	城牆、城壕、内壕、外壕、新砦期大型建築址 DF（祭祀用の坎か埧）
10 花地嘴*	鞏義	新砦期		(30 万㎡)	環壕 4 条、祭祀坑、地穴式房址、陶窯、灰坑、玉礼器
11 王城崗	登封	竜山晚期	東城 30m-（南）、65m-（西）		小城（東城、西城）：城門、窖穴、灰坑、奠基坑（人骨）、銅片
			西城 82.4m（南）、92m（西）、29m-（北）	1 万㎡	
		二里头早期	600 × 580m	34.8 万㎡	大城：城壕、祭祀坑（児童人骨）、灰坑

城址名	所在地	考古年代	規模（東西×南北）	面積・周長	城内状況
12 二里頭＊	偃師	二里頭期（二期～四期）	(2400 × 1900m)	(300 万㎡)	宮城 378 × 298m・10.8 万㎡（1 号～6 号大型夯土建築群、祭祀遺跡）、濠溝、貴族居住区、中型墓、祭祀活動区、一般居住活動区、緑松石・銅・玉石器・骨器作坊、陶窯
13 大師姑	滎陽	二里頭期	城壕 980m（北）, 620m（東）	51 万㎡ 2900m（復原）	城牆（南、北、西部分）、城壕、大型房基 F1・10 × 8.85m、陶水管、玉器、卜骨
		二里崗期（早商）			壕溝（二里頭城壕内側）、卜骨
14 望京楼	新鄭	二里頭期	625m（東）		城牆、城壕（二里崗期の外側）
		二里崗期	630m（南）, 590m（東）	37 万㎡	瓮城門 2（東）、城壕、井字形道路、大型夯土基址、祭祀坑、灰坑、墓葬
				168 万㎡	外郭、外城壕（北）
15 偃師商城	偃師	二里崗下層（殷早期）	内城 740 × 1100m	81 万㎡	大城城門 6（北 1, 西 3, 東 2）、城壕、宮城 216 × 237m・4.5 万㎡（大型夯土建築基址、祭祀場、池苑）、二号小城一辺 200m（糧倉）、排水施設
			外城 1215 × 1710m	190 万㎡ 5500m	三号小城一辺 140m（武庫）、四号基址、道路、銅器作坊、居住遺址、陶窯、灰坑、墓葬
16 鄭州商城	鄭州	二里頭四期（先商）	110m -		城牆
		洛達廟期、二里崗下層（殷早期）～上層（殷中期）	1700m（南）, 1870m（西）	320 万㎡ 6900m	内城：全面に夯土台基、東北部に加工人頭骨堆積、水池、祭石遺址、瓦甃見
		二里崗上層（殷中期）	3425m -（西南～南）		外郭：城壕、湖水、銅・製骨・製陶作坊、銅器窖藏（祭祀活動）、平民居址、墓葬、祭祀坑

城址名	所在地	考古年代	規模 (東西×南北)	面積・周長	城内状況
17 府城	焦作	二里崗下層～白家莊期 (殷早期～中期)	284m (北), 280m (西)	8 万 m ²	夯土基址 (一号: 二院式建築)
18 小双橋 *	鄭州	二里崗上層～白家莊期 (殷中期)	(800 × 1800m)	(144 万 m ²)	宮城牆基、濠溝、夯土基址、高土台基 50 × 40m、濠溝、青銅建築構件、祭祀坑、鑄銅遺址、居住址
19 洹北商城	安陽	殷墟一期初 (殷後期)	2150 × 2200m	470 万 m ²	宮城 795 × 515m・41 万 m ² (1 号、2 号建築基址、祭祀坑)、建築基址、道路、房址、墓葬、小城 240 × 255m (西南隅)
20 殷墟 *	安陽	殷後期	(6000 × 5000m)	(3000 万 m ²)	大型夯土基址群 100 × 350m・3.5 万 m ² (小屯、甲・乙・丙組 53 基址)、夯土基址、大型道路、濠溝、房址、墓葬、銅器・骨器・陶器・玉石器作坊、王陵 (西北崗)、大型墓地 (西区)、祭祀坑 (人骨、獸骨)、甲骨埋藏坑、大灰溝、大黃土坑 (池苑)
21 成周 *	洛陽	西周	(3000 × 2000m)	(600 万 m ²)	墓葬 (周人貴族墓、平民墓、殷人墓)、車馬坑、祭祀坑、灰坑、水井、鑄銅作坊 14 万 m ² 、大道、卜甲
22 漢魏故城	洛陽	西周中晚期	2600 × 1700m		城牆、貴族居址、墓葬
23 娘娘寨	鄭州	西周晚期	内城	16 万 m ²	城門、城壕、道路、灰坑、水井、陶窯、墓葬 (殉狗)
		春秋	外城 1200 × 800m-	100 万 m ²	城壕、墓葬 (一部殷文化要素)

河南竜山・二里頭・殷周都市遺跡表出典一覧

1. ①楊清「河南鄆城郝家台遺址出土の陶瓶和陶鬲」(華夏考古 1991 - 2、頁 109)
②河南省文物研究所、鄆城県許慎紀念館「鄆城郝家台遺址の発掘」(華夏考古 1992 - 3、頁 62)
2. ①梁思永「竜山文化—中国文明の史前期之一—」(考古学報・第七冊、1954)
②中国社会科学院考古研究所安陽工作隊「1979 年安陽后岡遺址発掘報告」(考古学報 1985 - 1、頁 33)
3. ①馬世之「徐堡城址の性質問題」(中原文物 2009 - 2、頁 37。中国文物報 2007 年 2 月 2 日から引用)
4. ①王青「博愛西金城竜山文化城址の多学科研究実践と探索—兼議新形勢下一線考古工作者的身分定位与転変」(華夏考古 2010 - 3、頁 60)
5. ①河南省文物研究所等「河南淮陽平粮台竜山文化城址試掘簡報」(文物 1983 - 3、頁 21)
6. ①河南省文物考古研究所等「河南新密市古城寨竜山文化城址発掘簡報」(華夏考古 2002 - 2、頁 53)
②杜金鵬「新密市古城寨竜山文化大型建築基址研究」(華夏考古 2010 - 1、頁 61)
7. ①河南省文物考古研究所「河南輝縣市孟庄竜山文化遺址発掘簡報」(考古 2000 - 3、頁 1)
②河南省文物考古研究所「輝県孟庄」(中州古籍出版社、2003)
8. ①河南省文物考古研究所、平頂山市文物局「河南平頂山蒲城店遺址発掘簡報」(文物 2008 - 5、頁 32)
9. ①中国社会科学院考古研究所河南新砦隊、鄭州市文物考古研究院「河南新密市新砦遺址東城牆発掘簡報」(考古 2009 - 2、頁 16)
②中国社会科学院考古研究所河南新砦隊、鄭州市文物考古研究院「河南新密市新砦遺址浅穴式大型建築基址の発掘」(同上、頁 32)
10. ①鄭州市文物考古研究所、北京大学考古文博学院「河南鞏義市花地嘴遺址“新砦期”遺存」(考古 2005 - 6、頁 3)
11. ①河南省文物研究所、中国歴史博物館考古部「登封王城崗遺址の発掘」(文物 1983 - 3、頁 8)
②北京大学文博学院、河南省文物考古研究所「河南登封市王城崗遺址 2002、2004 年発掘簡報」(考古 2006 - 9、頁 3)
12. ①許宏、陳国梁、趙海濤「二里頭遺址聚落形態の初步考察」(考古 2004 - 11、頁 23)
②劉慶柱「中国古代都城遺址布局形制の考古発現所反映の社会形態変化研究」(考古学報 2006 - 3、頁 282)
③杜金鵬、許宏主編『偃師二里頭遺址研究』(科学出版社、2005)
13. ①鄭州市文物考古研究所、蔡陽市文物保護管理所「河南蔡陽大師姑遺址 2002 年度発掘簡報」(文物 2004 - 11、頁 4)
②鄭州市文物考古研究所『鄭州大師姑(2002 - 2003)』(科学出版社、2004)
14. 報告書未発表。現地でのインタビューとインターネットの情報による。
15. ①中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏故城工作隊「偃師商城の初步勘探和発掘」(考古 1984 - 6、頁 488)
②中国社会科学院考古研究所河南第二工作隊「河南偃師商城小城発掘簡報」(考古 1999 - 2、頁 1)
③杜金鵬、王学栄「偃師商城近年考古工作要覽—紀念偃師商城発現 20 周年」(考古 2004 - 12、頁 3)
④杜金鵬、王学栄主編『偃師商城遺址研究』(科学出版社、2004)
⑤王震中『商代都邑』(中国社会科学出版社、2010、頁 20 ~ 130)
16. ①河南省博物館等「鄭州商代城址試掘簡報」(文物 1977 - 1、頁 21)
②楊育彬「建国四十年来河南商代考古の発現与研究」(中原文物 1989 - 3、頁 35)
③裴明相「鄭州商代王城の布局及其文化内涵」(中原文物 1991 - 1、頁 80)
④河南省文物考古研究所編著『鄭州商城—1953 ~ 1985 年考古発掘報告』(文物出版社、2001)
⑤王震中『商代都邑』(中国社会科学出版社、2010、頁 131 ~ 147、頁 227 ~ 245)
17. ①袁広闊、秦小麗「河南焦作府城遺址発掘報告」(考古学報 2000 - 4、頁 501)
18. ①河南省文物考古研究所、鄭州大学文博学院考古系、南開大学歴史系博物館学專業「1995 年鄭州小双橋遺址の発掘」(華夏考古 1996 - 3、頁 1)
②宋国定「鄭州小双橋遺址出土陶器上の朱書」(文物 2003 - 5、頁 35)
19. ①中国社会科学院考古研究所安陽工作隊「河南安陽市洹北商城の勘察与試掘」(考古 2003 - 5、頁 3)

- ②中国社会科学院考古研究所安陽工作隊、中加洹河流域区域考古調査課題組「河南安陽市洹北商城遺址 2005 ～ 2007 年勘察簡報」(考古 2010 - 1、頁 3)
20. ①鄭振香「殷墟発掘六十年概述」(考古 1988 - 10、頁 929)
 ②胡洪琮「読《商代殷都考》の幾点意見 - 与閻鉄成先生商榷」(中原文物 2009 - 6、頁 99)
 ③王震中『商代都邑』(中国社会科学出版社、2010、頁 312 ～ 411)
21. ①葉万松、張劍、李德方「西周洛邑城址考」(華夏考古 1991 - 2、頁 70)
 ②梁雲「成周与王城考弁」(考古与文物 2002 - 5、頁 51)
22. ①中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏城隊「漢魏洛陽古城城垣試掘」(考古学報 1998 - 3、頁 361)
23. ①鄭州市文物考古研究所「河南滎陽娘娘寨城址西周墓葬発掘簡報」(文物 2009 - 9、頁 4)
 ②馬世之「娘娘寨城址性質問題試探」(中原文物 2010 - 5、頁 39)

地図作製典拠

- 地図 1: 「河南竜山・二里头・殷周都市遺跡表」による。
- 地図 2: グーグルアースの衛星写真をもとに華夏考古 2010 - 1 p 62 図二を参照して作製。
- 地図 3: 考古 2004 - 11 p 24 図一をもとに現地インタビュー情報追加により作製。
- 地図 4: 考古学報 2011 - 3 p 387 図一をもとに考古 1998 - 6 p 1、考古 1999 - 2 p 12 を参照して作製。
- 地図 5: 王震中『商代都邑』(中国社会科学出版社、2010) 所引の p 25 ～ 27 図 1 - 4、図 1 - 5、図 1 - 6 を参照して作製。
- 地図 6: 考古 2004 - 3 p 60 図一をもとに前掲王震中書所引の p 133 図 1 - 46 を参照して作製。
- 地図 7: グーグルアースの衛星写真をもとに考古 2010 - 1 p 4 図一、現地インタビュー情報により作製。
- 地図 8: 考古 2007 - 10 p 4 図一、グーグルアースの衛星写真をもとに考古 1988 - 10 p 934 図一、中原文物 1995 - 3 p 84 図一、考古学報 1979 - 1 p 28 図一を参照して作製。
- 地図 9: 考古 2009 - 7 p 25 図二をもとに現地インタビュー情報により作製。

Abstract河南龙山文化、二里头文化时代与商周时代城市的特点
—2011年中国古代城市遗址调查报告

在河南省的中心地区,到龙山文化中期小规模军事城堡大量出现。到了新砦、二里头时期,王城岗大城、新砦古城、二里头遗址等带有宗教设施的大型城市开始出现,这些都可以与夏王朝的都城联系起来。这个时期从规模来看,城市正分化为若干等级,可以认为在中心地区的核心城市,新的支配系统正在逐渐形成。

到了商代出现了巨大的城市。早期、中期发现了建造有外廓的偃师商城以及郑州商城,后期早段的洹北商城也建造有高大城墙。上述城址全部被认为是商王都。但是另一方面也发现了不具备高大城墙但是规模宏大类似于王都的小双桥、殷墟遗址。王都的形态发生二极分化。至于王都以外的地方城市,只是在河南省中部地区发现了望京楼城址·孟庄城址和府城城址。而西周时期的城市遗址由于衔接了商代城市遗址与春秋战国时期的城址,变得十分重要,但是在河南省中部的王都,地方城市的详细状况基本上都不清楚。

关于商周时代的城市遗址问题,大家在与春秋战国时期的城市遗址进行比对后发现存在很多问题。第一、外郭以内,宫城以外的居民与手工作坊的性质并不清楚,与统治者的关系需要明确。第二、那些引人注目的没有城墙等防御设施的王都问题。若是按照特例考虑的话,其数量并不少,其原因的考察不应该单纯的只局限于军事理由,城墙不必要的积极因素也需要考虑。第三、地方城市的性质及与王城的关系问题。现阶段地方城市遗址的事例十分匮乏,对研究而言,资料的收集是必需的。